

美術館と記憶の磁場

「交差する表現——工芸／デザイン／総合芸術
Cross Sections 1963-2013」展によせて

稲賀 繁美

三層の時の堆積

ひとつの組織にとって半世紀とは大きな節目だろう。創設当時五〇代の責任者はすでに物故しており、現役の第一線に立つ美術館員たちにとって一九六三年といえど、まだ幼少で物心も付かない時代。さもなければ、未生以前である。当時少壮の三〇代で活躍を始めていた世代が、現在すでに八〇歳を迎えている。

半世紀の京都国立近代美術館の回顧はまた同時に、一五〇年にわたる近代京都の歴史を、美術工芸という視点から問い直す試みとも輻輳する。このため展示会場では、ふたつの異なった時間軸が折り重なった展示空間を演出するという、高度な工夫が要求された。さらに国立近代美術館京都分館として出発した美術館は、四半世紀を経過する直前の一九八六年に、現在の新館へと移行した。ひとつの美術館にとって、展示会場が一新されるというのは、物理的断絶を伴う事件で

ある。勸業館別館に設置された初代美術館の記憶をいまだに宿しているのは、現在すでに三〇代後半より年配の人々に限られるだろう。こうした三重の記憶の堆積を不可視の磁場とする展示空間は、いかなる断面群 Cross Sections を見せるのか。

美術館という場所で、「作品」と呼ばれる物品や映像を陳列展示する展覧会という制度は、電子機器の発達著しい今日、急速に時代遅れの装置となりつつある。だが人も作品も、そして生活の営みも、〈場〉というものと無縁には存在しない。作品群は、一箇所に集められ、ならかの星座を描くことによつてはじめて、あるメッセージを発し始める。それを五感によつて体感すべく〈現場〉に身体を運ぶ経験は、〈時〉との対話のためにも不可欠な営みであり続ける。

近代と現代とはどこで区切られるのだろうか。きわめて恣意的な定義が許され

るならば、「近代」と呼ばれる歴史空間は、それなりに情報が整除され、通史が確立され、教育その他の手段によつてそれが後世へと継承される準備が整った過去を指す。後世に残すべき人名と作品名とが分別され、それら選ばれた品々や藝術家の集合が、ある時代的符牒を帯び、先行と後続に対して自己主張をしつつ、系譜を織り成してゆく。それに対して「現代」とはまだそうした見通しが立たず、歴史的な位置づけも不明な運動が錯綜して同時進行しており、当事者にも、なおその全貌が見えない段階を指す。仮にこのように乱暴に定義することが許されるならば、そこで近代美術館とはいかなる使命を担うべきなのか。

いうまでもなく、他所で現在進行形の事態が視野に収まるためには、或る程度の時間的遅延は避けがたい。歴史とはこうした遅延を不可避の条件としつつ、時間軸をひそかに遡ることではじめて成立

する。そこでの共通理解という共同幻想が社会的に成立しえた時代が「近代」だった、ともいえようか。「近代以降」postmodernはそれ自体がすでに時代遅れで陳腐化した、もはや「近代」の秩序を復帰することなど、電子情報革命が行った今日では、失われた過去を取り戻



「交差する表現」第一部 会場

すのにも似て、とても適わぬ技だろう。だが反対に、いかに電子情報網が発達したとしても、瞬時にすべての情報を消化する能力など、もとよりヒトには望めない。それどころかマス・メディアに報道されるべき情報の選別がますます困難となり、ニュース番組の陳腐化が亢進し、



歴代展覧会ポスターのコーナー

交差する表現の「近代」と「現代」

いささか場違いな感想かもしれない

美術館は、従来のように現代を近代へと見極め、その移行を司る整流器たる役割を担い続けることができるのか。

新聞や雑誌媒体が必要な購買者すら確保できなくなりつつある昨今、人々が共有できる共通理解の圏域は、かえって矮小化している。僅かな世代差や地域差、あるいは関心の違いで、共通の話題が喪失する。はたしてそこで、近代美



「スターバー」再現展示

が、「開館五〇周年記念特別展 交差する表現」の会場に足を運んで、閑散とした会場で得たのは、そうした感興だった。「工芸表現の一断面」と銘打たれた三階会場では、「近代京都」工芸が見事に鳥瞰できる。川島織物による狩野芳崖の綴織《悲母観音》や、竹内栖鳳《ヴェニス》の月》、山本春拳《ロッキーマウンテン》の雪》の織物には、繊維産業の輸出工芸を主軸のひとつとした二〇世紀初頭の地場産業の断面が如実であり、平安遷都千百年記念の平安神宮造営のための伊東忠太の図面も、明治後期の京都の設計図の一断面をなす。浅井忠と神坂雪佳との確執を軸とした工芸界の



動向は、民藝や富本憲吉から竹久夢二へ、さらには恩地孝四郎へと受け継がれて、大正から昭和へと揺曳する。その先に一方では八木一夫らの前衛オブジェ焼き、他方には上野リチ・伊三郎夫妻によるモダニズムが「スターバー」原寸部分復元によって辿られる。おもに山野英嗣学芸課長を中心に企画されてきた近年の展覧会のさわりを堪能しつつ、最後の区画を廻ると、その裏側では、歴代の展覧会ポスターが壁一面を覆っている。美術館の多



第二部 初期の所蔵品を中心とした展示風景

彩な活動の軌跡が瞬時に集約され、膨大な記憶が一度に喚起されて、思わず眩暈に見舞われる。

ここまで概略、美術館設立以前の時代を回顧したうえで、上階の第二部「美術館と〈工芸〉」へと歩をすすめる。ここま

で登ってくる来館者は多くなく、それがいかにも惜しいのだが、こちらの展示風景は、「現代」が「近代」へと整除されつつあった現場を髣髴とさせて、ふたつのフロアに横たわる認識論的な断面を痛感させ

せる。あいにくこちらについては図録が準備されていないのだが、なんとかこの展示風景を記録に残せないものだろうか。「現代日本陶芸の展望」展（一九六三年）、「現代国際陶芸展」（一九六四年）、「稲垣稔次郎展」（一九六六年）、「現代日本の工芸」展（一九六七年）、「現代陶芸の新世代」展（一九六八年）、「陶工 河井寛次郎」展（一九六八年）、「川勝コレクション」展（一九六八年）以下、名称を羅列するわけには行かぬので省略するが、現代を見極めて収蔵品を蓄積してきた美術館の軌跡が、まばゆいほどの光彩を放って登場する。歴史形成の現場がここにあったこと。その戦慄を追体験できる。

展示技術に関しても、とりたてて高予算による演出など取り入れていないにもかかわらず、陳腐な名品陳列などとは明確に一線を画する緊張感が、展示室ごとに如実に感じられ、普段の最上階の雰囲気とは一変して、作品たちがことごとく妖気のようなものを発散させている。これを見せたいがために、わざと三階の「近代京都工芸」の歴史展示部門は、淡々とした会場構成を取ったのか。そう訝しがらせるだけの断絶が、三階と四階とのあいだには仕掛けられていた。（この一文など読むこともないだろう）若い世代にも納得がゆくような例をひとつだけ示すならば、昨今急に人気を得ているルーシー・リーやハンス・コパーの陶藝の粹



第二部 1980年代前半の動向を示すガラスとジュエリー作品

は、すでにMONAKAが、そんなハイカラな横文字表記など身にまとうよりずっと以前の六〇年代末の開館当初から、展示され、収集されていた。

脱・近代の工芸復権への期待

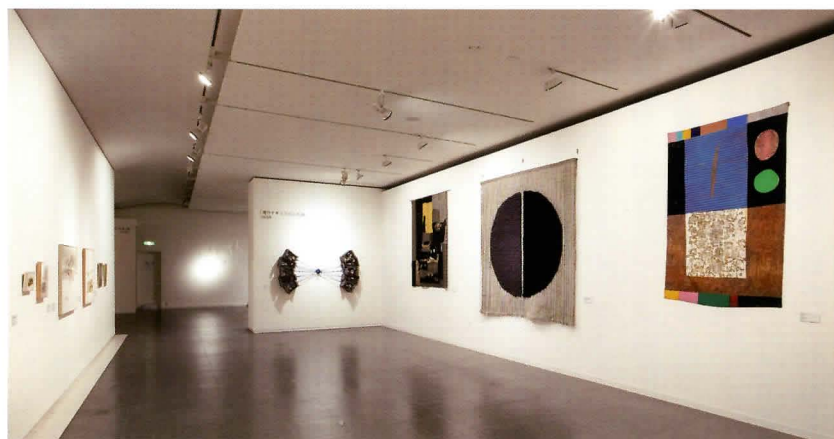
地場産業とのかかわりゆえに工芸美術、とりわけ織や染織、陶磁器や漆藝に力点をおく特異な近代美術館という設立趣旨は、モダニズムとポスト・モダニズムを経過してしまった現在において、新



第二部「現代の陶芸——アメリカ・カナダ・メキシコと日本」展(1971年)の出品作品を中心とする日本の陶芸作品



第二部「現代の陶芸——ヨーロッパと日本」展(1970年)、「現代の陶芸——アメリカ・カナダ・メキシコと日本」展(1971年)の出品作品を中心とする海外の陶芸作品



第二部 海外の染織作品による展示風景

たな今日性を獲得し、半世紀におよぶその館の歴史に、顕著な先見性を帯びさせることとなった。もはや視覚一辺倒の「見る」だけの時代は終焉を迎え、手造りの工藝ならではの触覚、聴覚を動員した美的・感性的体験、実用の器との再統合による味覚や嗅覚との共感覚体験の再開発が、ヴァーチャル・リアリティーの彼方の将来を予見している。

「交差する表現」という題名に戻るなら

ば、海外の陶藝(セラミック・アート)、ガラスあるいは織(ニードルワーク)との切り結びが、ここで死命を制する。日本の工藝が素材への従順さにおいて優位に立つならば、素材をあくまで材料と割り切って自律する造形を追求する意図は、欧米作家に比べて日本ではきわめて希薄である。両者を無意味に敵対させることも、逆に安易に両者の融合を目指すことも、筋違いだろう。両者の磁場のcross

sectionsから何が生まれるか。そこに京都国立近代美術館の今後半世紀の新たな受胎と胎動とを期待したい。

*なお「交差する表現」展図録は、美術館半世紀の貴重な証言集、視覚資料集となっていることを、末尾ながら付記しておこう。半世紀の展覧会企画の軌跡に即した作品収集資料集が、書籍ないしネット配信の形式で提供されることを期待したい。

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授)

《表紙》
「交差する表現」第二部 会場風景
撮影：(6ページの下2点以外全て) 河田憲政

二〇一三年十月十日 発行
編集兼 京都国立近代美術館
発行所 京都国立近代美術館
印刷所 野崎印刷紙業株式会社
発行人 京都国立近代美術館
〒606-8344 京都市左京区岡崎門前寺町
電話(〇七五) 七六一(代表)
隔月発行

ワコール
中央信用金庫
KYOCERA
当館は上記の賛助会員の皆様からご支援、ご支持をいただいております